

第21回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会 組手無差別級の見所

小山恭弘(チャンピオン)対 鈴木雅博(前チャンピオン) 1回戦第1試合で激突!

リアル・フルコンタクト・テコンドー最強チャンピオンの証明戦

2010年11月19日

日本テコンドー協会

宗師範 河 明生

かつて日本テコンドー協会(以下、J T A)は、「日本の跆拳道界最強」を標榜していた。

「日本の跆拳道界最強」であるか否かは、

J T Aの全日本全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会の優勝者が

他流派テコンドーの当代全日本大会の優勝者との客観的な比較において決せられることに何ら異論はない。

我がJ T Aは、「テコンドーは弱い。実践で使いものにならない」等々、

日本の打撃系格闘技界で蔑まされていた時期、

「テコンドーが強い！」

ことを日本の打撃系格闘技の強豪がひしめくK - 1 M A X等で証明し、

日本の格闘技界における格闘技としてのテコンドーの地位を高めた尾崎圭司を輩出した。

これは史実である。

尾崎は、身長168cmにも満たない体力的ハンディをものともせず

2002年の第13回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会無差別級組手および

2003年の第14回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会無差別級組手において連覇を果たした。

試合内容についても一本勝ち、技有り勝ち等、審判はもとより観客の誰が見ても圧勝の内容であった。

この「尾崎圭司時代」に、他流派のテコンドー・チャンピオンの中で、尾崎に勝てる選手はいなかった。

ゆえに「最強テコンドー」を標榜することが可能となった。

尾崎がプロに転校後、「最強テコンドー」の伝統を守ったのは斎藤健である。

斎藤は身長184cmの長身。長い足から放たれる蹴り技は他を圧倒し、

尾崎同様、一本勝ち、技有り勝ち等、審判はもとより観客の誰が見ても圧勝の内容であった。

2004年の第15回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会無差別級組手、

2005年の第16回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会無差別級組手、

2006年の第17回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会無差別級組手において3連覇を果たした。

全日本F T大会初観戦の門下生が異口同音に「斎藤選手だけは別格なのが初心者の自分にもわかりました」

という感想を述べていたことが記憶に新しい。

この「斎藤健時代」に、他流派のテコンドー・チャンピオンの中で、斎藤に勝てる選手はいなかった。

おそらく同じウェイトで顔面強打有りのルールなら

空手等も含めて日本のアマチュア打撃系格闘技界の中で最強であったと思われる。

実際、斎藤は日本のアマチュア打撃系格闘技界で最も競争の激しい70kg級(K - 1 M A Xの規定上限体重)

の新空手全日本大会(最重量級)およびKAMINARIMON(最重量級)において優勝している。

しかもその殆どの試合においてKO勝ちであった。

ゆえに我がJTAは、「最強テコンドー」を5年間標榜することが可能となった。

しかし、尾崎圭司と齋藤健が築いた「テコンドー界最強伝統」を継承できる「最強チャンピオン」が2007年の第18回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会以降誕生していない。

圧倒的な強さで優勝している者が3年間3大会連続して存在していないのだ。

尾崎や齋藤とは異なり、一本勝ちが一つもないのがその証左である。

テコンドー界を問わずそしてプロ・アマを問わず、

いずれの打撃系格闘技団体・流派でも

自派を代表するチャンピオンにつき自画自賛するのが普通である。

しかし、余人はいざ知らず、不詳河明生はそういうタイプの人間ではない。

やはりJTAの競技力発展をはからなければならない立場上、

「強さの客観性」を問わなければならないのだ。

このような事情に基づき第18回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会のポスターに掲載していた「最強跆拳道」

の5文字の使用を翌年度以降、控えたのだ。

確かに、他流のテコンドー界のチャンピオンは、分裂騒動のあおりを受け、

他の分裂した空手等のアマチュア打撃系格闘技団体同様、「競技力のピラミッド」が崩れ、

選手層が薄くなった結果として「チャンピオンの小粒化」が進行しているのが現実である。

これが組織が安定し、「競技力のピラミッド」が堅持されている競争の激しい柔道界との決定的な差違である。

しかも一つの流派で体重別5階級程度あり、

全日本大会を運営できるテコンドー組織が4団体あるとすれば、

単純計算して1年に「全日本テコンドーチャンピオン」と称する選手が20名前後も存在することになる。

日本におけるテコンドーの歴史と競技人口を考慮した場合、チャンピオンが多すぎるのが偽らざる実感である。

そのような状況中、我がJTAの全日本チャンピオンは、

武道性・格闘技を堅持する無差別級を制した唯一のチャンピオンなのだから

相対的な強さと希少価値において他のテコンドーチャンピオンに勝つことすらあれ劣ることはないのである。

しかし、だからといって有頂天になってはいけない。

関ヶ原の戦いに勝利し、戦国時代に終止符をうった徳川家康が、有頂天になっていた将兵を戒めた言葉であり、

日露戦争におけるバルチック艦隊との日本海海戦に勝利し、

有頂天になっていた海軍将兵を戒めるため徳川家康に倣った東郷平八郎の言葉を肝に命じるべきである。

「勝って兜の緒を締めよ」

我がJTAも故事から学ばなければならない。

組織の幹部はもとより、チャンピオン自身が謙虚にならなければならない。

一度、幸運に恵まれて優勝したと考えるべきなのだ。

だが、2連覇すれば、幸運ではなく実力であると言える。

同様に、1大会において優勝すれば2連覇に準じると言えよう。

そういうチャンピオンが出て欲しいのである。

小山恭弘は、第20回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会を制した現役チャンピオンである。
他方、鈴木雅博は、第19回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会を制した前チャンピオンである。
最強チャンピオンは二人はいない。
一人だけがリアルチャンピオンなのだ。

尾崎や斎藤健という一時代を築いた

「最強跆拳道家」

という評価を受けられるか否かの候補が小山と鈴木なのだ。

小山は24歳、鈴木は23歳。

二人とも若く、打撃系格闘技の常識で言えば今が旬の選手である。

双方ベストな状況でいずれが「最強跆拳道家」の候補に値するのかの雌雄を決しなければならない。

小山と鈴木のゴールデンカードを1回戦第1試合に決めた所以である。

また両名が優勝した際、小山は69kg、鈴木は66kgといずれも軽く、本大会も体重の変動はない。

我がJTAは、世界のテコンドー界の中で唯一の無差別級のフルコンタクト・ルールである。

よって無差別級のチャンピオン＝「最強跆拳道家」という称号を得るためには、

最も重い体重の選手に勝たなければならないのである。

そこで2回戦の対戦相手は、最も重い体重の選手同士の勝者と闘うことになる。

その試練を乗り越えてこそ初めて

「リアル・フルコンタクト・テコンドー最強チャンピオン」

の証明となる。